

# いんなん しています。

わだいのいんなん

## 意地の廃校

廃校調査では、学校沿革史や郷土誌などを調べますが、昭和初期くらいまでの議会議事録には、「生々しい」記録があり興味を引かれます。

明治22年、日本政府は市町村制を実施し、国家として縦割りの強固な地方自治体制の確立を目指します。和歌山県ではこの時に232の市町村に統合。これ以前には1639の町村浦で構成されていました。浦とは、雑賀崎浦、下津浦、串本浦など58浦。「海のむら」です。その1639を調整し学校が形成されますが、実

際はお寺を借用し寺小屋と変わらない実態もありました。余談ですが、近著『熊野の廃校』(湯崎、中島共著)の執筆時点での調査学校数は1626。学校変遷史調査なので新旧校の重複もありますが、かなりよい線を行っている感です。

市町村制ができると、学校統合問題があちこちで出てきました。いつまでもお寺の廊下の間借りというわけにはいかないだろう、という事です。そこで近隣地区の学校をまとめた新築学校の立地問題が起りま

す。A地にすればB地の子は峠を3つも越えねばならない、B地にすればA地の

# 1639の吾(あ)が

高台の学校から見る元、海部(あま)郡大崎浦(現在の海南市)



子は不便だ。A・B間の調整は紛糾し、形勢の不利なB地区では地区内の全児童を不登校にするようなストライキをしたり、中央に陳情に行ったり、ついに村長の辞職問題に発展することなど珍しくありませんでした。紛糾の結果、「痛み分け」としてAからもBからも不便な山の中のC地点に学校を新築することに決定。それが当時の「合意形成」でし

た。またある学校では、村が推薦した校長ではなく県が別の校長を指名したことに村を挙げて反対。村の意志に反してこの校長が赴任するならば、「一歩も村内には入れない」とまで激しく拒否。県との合意が取れない(つまり、負けた)となるや、村会はこの学校の廃校を決定してしまします。実際に廃校になった。町長の辞職や学校をぶっしてしまふほどの激しさの理由は何なのでしょつか。

## 生の歴史

「土地」と政治を割り切つて考えるのが「近代」なのかもしれませんが、割り切れぬほどの在所への強いこだわり。郷土愛というよう

な生やさしいものではなく、通学が不便という分かりやすい理由以上のもの。誤解を恐れずにいえば、学校は大人の意地の象徴として利用されたのではないかと、土地に結び付いた「吾(あ)が」の深さと激しさでしようか。あが、の背景とは何なのか、筆者らにも十分に分析できていません。

強い「村の意志」も風俗も飲み込んで、市町村は戦後になって204、昭和の合併で50、平成の合併で30に統合されていきました。

現在の私たちの県土には、1639の土地の苦しみや喜びや親にすがり必死に生きた子らの歴史が詰まっています。その歴史の証言者の一つが廃校です。

廃校はいま、福祉施設などに役割を変えたり、広い建物がビジネスチャンスとして市場流通されたり、あるいは山奥の廃校を探し出しては写真を撮りコレクション

学校のルーツだった神明神社(紀の川市)



## プロフィール



湯崎真梨子(ゆざき まりこ)

和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授

専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。